

# RECOVERY

ISLAND OKINAWA

リカバリーアイランド沖縄

2018 SUMMER

Vol. 021

## 新施設移転のお知らせ

依存症治療最前線

「身近にあるネットゲーム依存

予防と回復支援のために」 第2回

医療法人社団利田会 八木 眞佐彦

PLEASE  
TAKE IT FREE

ご自由に  
お持ち帰りください

無料



# RECOVERY

ISLAND OKINAWA

リカバリーアイランド沖縄は、  
依存症から回復したいと願う人たちに、  
希望のメッセージと様々な選択肢で、  
「あなた」を応援する季刊誌です。

## CONTENT

### 新琉球GAIA

琉球GAIA代表理事 鈴木 文一

### 依存症治療最前線

身近にあるネットゲーム依存  
予防と回復支援のために

医療法人社団利田会 八木眞佐彦

### 仲間の声

「私の居場所」

琉球GAIA女性ハウス Mさん



来通りの対応だけでは解決が極めて困難なのが現状です。

アルコール問題についても特にここ沖縄はアルコールについて悪い意味で寛容で飲酒運転検挙率は毎年全国トップクラス、高血圧や糖尿病などの飲酒に絡む生活習慣病も深刻な社会問題化しています。それに伴いアルコール依存に関する相談も増加傾向です。

またギャンブル依存、ネットゲーム依存の問題も最近ではメディアで取り上げられることも多くなり相談も急増しています。

これら依存症に係る対応として「処罰」だけではなく「治療」も必要だという声が多くなっているのは喜



## 新琉球GAIA

～きめ細やかなサービスを目指して～

Photo by Takkoja.com

ばしい社会の変化ですがまだまだその「治療」の受け皿が不足しているというのが実情です。以前より私たちも電話相談体制の強化や全国の医療機関やリハビリ施設と連携を取りながら支援をしています。日々、有効な治療へつなげる受け皿の少なさを痛感しています。

その受け皿として私たちが琉球GAIAが「どのような取り組みが出来るのか」、「もっと効果的なサポートはできないか」が以前からのスタッフ会議でのテーマでした。

そして今回、公益財団法人みらいファンド沖縄に協力していただき、多くの方々の賛同を得、長年の夢だった新施設移転を実現することが出来ました。

この移転を機に利用者個人に応じたよりきめ細やかなサポートの充実、これまでは実施が困難だった新しいプログラムの開拓、依存



Photo by Takkoja.com

この度、私たち琉球GAIAは今年8月をもって新施設に移転することになりました。これまで私たちの活動に対してご理解をいただきご協力してくださった多くのご家族、関係者の皆様にはこの場を借りて心より感謝を申し上げます。

私たち琉球GAIAが沖縄を回復の地として選んだのが2002年。これまでにアルコールや薬物、ギャンブル依存症に苦しむ仲間の回復・社会復帰をサポートしてきました。

その活動中も施設の規模を拡充したい、今以上に依存症についての様々なプログラムを充実させたいと願っていましたが、一つの転機になったのが琉球ガイア10周年フォーラムです。このフォーラムはガイアが沖縄に開設し10年たった節目という意味と沖縄県内で依存症関係者のネットワークを築ききっかけにしたという思いからでした。

そして沖縄県内の薬物・ア

ルコール・ギャンブル・摂食障害・ニコチン等の様々な依存症に係る援助職のネットワーク、情報交換、スキルアップの場として沖縄ANDOGネットワークを沖縄協同病院の精神科医小松知己先生と共に立ち上げましたが、その例会に参加するうちに、沖縄ANDOGで得た知識や技術を生かして施設を充実させたいという私の願いはますます大きくなりました。

現在、私たちを取りまく依存症問題は多様化、複雑化しており大きな社会問題になっています。インターネット等の普及により乱用者の多様化、若年層への浸透など一般社会への浸透も懸念されています。違法薬物の取締りの強化や薬物流入阻止への水際作戦の徹底など様々な対策はとられてはいますが、薬物関連事犯の再犯率は50%以上と依然として高い水準で推移しています。また違法ではない処方薬依存の問題も深刻で従

症についての啓蒙活動など多くの事が実現出来そうです。

特に社会復帰へ向けた生活・就労支援、また依存症以外の重複障害を持つ仲間への細やかなサポート等は早急に体制を整えようと考えています。

開設以来、琉球GAIAが大切に行っている理念が2つあります。1つは「沖縄の大自然の中で仲間と共に回復する」です。ここ沖縄には温暖な気候、美しい自然、ゆったりと流れる時間、朗らかな人々など回復に役立つものが日常にあふれています。その中で心身ともに健康になって

いく仲間と互いの変化を認め合いながら共に回復してほしいと願ってきました。現在までに多くの仲間が回復・社会復帰を果たしたことや施設近郊に50人を超える退寮した仲間のコミニティが出来上がっていることを振り返ると琉球GAIAを沖縄に開設したことは間違っていないと確信しています。

もう1つの理念は「家族と共に回復する」です。依存症は家族を巻き込みながら進行していく病気です。本人同様に家族も傷つき、疲れ切ってしまうます。ですから家族のサポートも大事になり、また家族が回復していくことも依存症本人の回復にも良い影響を与えます。これは琉球GAIAの大きな特徴ですが家族間のコミュニケーションの回復がプログラムの中心となっています。必要があれば家族

と連絡をとったり、定期的に一時帰宅しながらプログラムを継続する方も多いため家族も本人同様に家族会や自助グループに参加していただいています。これは同じ悩みや問題をもつ仲間と出会い、依存症についての理解を深め、元気を取り戻してもらうことが目的です。家族の為の宿泊研修会（東京家族会共催）もおかげさまで好評で今年も12月8日・9日に開催予定となっています。

琉球GAIAの家族プログラムは開設以来、近藤あゆみさん（GAIA幹事 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 診断治療開発研究室長）に協力して頂き今日まで活動してきました。今後も近藤さんと相談しながら家族向けのプログラムも充実させていきたいと考えています。

これまで私は「どんな仲間でも徹底してプログラムを実践すれば必ず回復できる」と信じて活動してきました。回復は苦しいことやつらいこともありますが、その中でも自分自身が健康的に変化していくことを実感し喜びを感じながらプログラムに取り組んでほしいと願っています。そして多くの仲間と出会い、アルコールや薬物、ギャンブルなどが無くても楽しい健康的な生活を取り戻してほしいとねがっています。

私たちも稲田隆司先生（現もとぶ記念病院 副院長）のことば「笑顔のあるところに人は集まる」という言葉を胸にスタッフ一同い今まで以上に頑張っていきたいと思えます。

琉球GAIA代表

鈴木 文一

## お知らせ

4月より稲田隆司先生から引き継ぎ尾野敏朗先生が仲間の体調管理や処方調整を見てくれることになりました。よろしくお願いいたします。

夏の早朝、きれいに輝く朝焼けを眺めながら沖に向かってパドルをする度に、透き通った海に感動し沖縄の豊かな自然に感謝します。豊かな自然に恵まれた素晴らしい環境の中で、琉球GAIAでは様々な依存症教育プログラムの実践を通じて依存症リハビリテーションが続けられ着実な成果を上げていることと思います。医療施設として、今後も琉球GAIAと密な連携を図りながら、「Keep paddling」という有名な言葉があるように、「回復し続ける」ことをサポートしていきたいと考えております。今後ともよろしくお願い致します。

ひまわりクリニック 院長 尾野 敏朗





## 仲間の声

### 「私の居場所」

琉球GAIA 女性ハウス  
Mさん

こんにちは。私は今まで色々な種類の薬物を使ってきました。中学生になった頃から自分に自信がなくなり、私にとって薬物は現実を見なくても良い魅力的な存在でした。その時は周りの子も使っているし、若気の至りだからそううちに使わなくなっていくだろうと深刻に考えずに暇つぶしに使ったりする程度でした。やがて毎日のように使うようになり、薬なしでは生活が送れなくなってしまうしました。

身も心もボロボロになり、自分の状態もよく分からなくなった私は「もう薬物を止めることが出来ないのでは」という恐怖心が込みあげてきました。それでも「薬物なんてその気になればいつでも止められる」と自分自身をごまかし、目の前の快楽に溺れ薬物を使い続ける日々を過ごしていました。

その時は依存症という言葉も知らなかったし、もちろん自分が病気になるっていても考えていませんでした。

薬物を使い続け、どうしようもなくなった私は家族に助けを求め、GAIAに繋がることになるのですが、施設のイメージは傷の舐めあいをする場所だとか、悪い仲間と出会いもつと薬物の知識を覚える場所なんじゃないかと不安でした。しかし実際入寮してみるとイメージとは違い笑顔の仲間も多く明るい雰囲気、薬物を止めるにはこの先苦しいことばかりだと決めつけていた私は正直すごくびっくりしました。

私はGAIAに2度入寮することになるので、始めの入寮では泣いてばかりでした。仲間たちの笑顔も好きじゃなかったし、心配して声をかけてくれる仲間に対しても煩わしく思い、3カ月経っても心を開くことがどうしても出来ませんでした。そして「これだけの期間薬物を使っていないうし、地元に戻っても使わずに生きていく！」という自信も出てきて、仲間やスタッフに反対されるなか地元に戻ることにしました。今思い返すとその頃の私は自分が依存症だと認めることが出来ていなかったんだと思います。

しかし地元に戻り一週間もすると薬物の事しか考えられないようになりあっさり再使用してしまいました。その薬物も全然楽しめず、罪悪感で一杯になりながらも入院するまで止めることが出来ませんでした。結果3カ月入院することになるのですがこれがきっかけで「真剣に薬物を止めたい！」と思うようになりGAIAに再入寮することになりました。

再入寮しても初めのころは、仲間ということも嫌！新しいことをするのも嫌！とにかくすべてが嫌！という感じでまだまだ心を開くことが出来ませんでした。そんな私にも仲間は話しかけてくれたり、ウォーキングやジムのプログラムと一緒に行動しようとしてくれたり優しく声をかけてくれました。頑なだった私の心も少しずつ打ち解け、仲間と会うことにワクワクするようになり、一緒にプログラムに参加することを楽しくめるようになりました。

そして現在クリーンが1年2ヶ月になります。GAIAに入寮してよかったことはたくさんあります。笑顔が増えたこと、素直に話が出来ようになったこと、自立を目指して仲々できなかった親離れが出来そうなこと、何より一緒に止めていく仲間と出会えたことです。あんなに嫌いだっただ仲間たちも今では私自身の成長に欠かせない大切な存在になったのです。

今年6月、GAIA女性ハウスを退寮しアルバイトをしながら通所でお世話になっていきます。アルバイトをしながらGAIAに通うのは思っていた以上に大変でアルバイトを休みがちになることもあります。地元に帰って以前と同じことを繰り返すのは絶対に避けたい

し、私自身薬物を止め続けるためにまだまだ仲間の助けが必要で安全だと思い沖繩に残ることを決めました。まだまだ私自身変えていけないといけないところやチャレンジすることがたくさんありますが、これからも仲間と一緒に笑顔で楽しみながら薬物を止めていきたいと思えます。そして仲間に支えられてばかりだった私もいつか仲間の支えになれるようになっていきたいと思います。

最後に薬物でボロボロになっていた私を見捨てずに今でもサポートしてくれている家族に感謝をこめて終わりたいと思います。ありがとうございます。



# 身近にあるネットゲーム依存

## 予防と回復のために

### 第2回



八木 眞佐彦

医療法人社団利田会 次長  
精神保健福祉士・社会福祉士

法務省東京保護観察所で社会復帰調整官を経験後、平成25年8月から現職に就く。各種依存症のほかネットゲーム依存の相談支援、保健所等でのひきこもりの家族支援にも携わる。趣味はサイクリング。

様々なアディクション(依存症)の類似点と形成過程

### ネットゲーム依存に係る3つの特徴

- ① 父親不存(仕事依存、單身赴任、離別死別、アルコール問題など)
- ② 母親過密着(支配と干渉、過大な成績への期待、母子間相互依存と攻撃の繰り返し)
- ③ 当事者に発達障害(50%以上)

父親不存とは、離別や死別のみならず「過労死国家日本の職場環境自体」が家庭に機能不全をもたらしているとも考えられます。前記①の父親ワーカホリックを考えると「KARUSHI」が英語になってしまっただが国の過酷でイビツな労働環境の問題を感じざるを得ません。更に・・・

- ・家庭(学校)でのトラウマを抱えたままであることが多い。

・それが性虐待や深刻な虐め被害などの場合、平素はその記憶を無かったこととしてバランスを保ちます。そのバランス取りの手段が依存症という場合も少なくありません。

経験上、特に目的もなく漠然とユーチューブ閲覧を続けている人にこのパターンが多いと感じます。

- ・例えば両親の口論やDVなどの家庭で萎縮しながら育った、あるいは親からの過大な成績への期待を背負わされてきた頑張り屋さんは、子供らしくはいだり甘えたりした経験が不足していて、人を信頼したり人に依存しにくい面を持ってしまいがちです。これらのことは後に「孤立の病」依存症」との親和性を高めることでしょう。もちろん家庭ばかりではなく学校での挫折体験や、いじめを受けた経験もネットゲーム依存の誘因になり得ます。
- ・支援者や親が、当事者の辛さや大元の心的苦痛に対し何等の共感も示さず、ただ単にパソコンやスマホを取り上げたい、止めさせたいと躍起

(徐々にお酒に強くなるのと同じ)やがて元の量や時間、金額では効果を得られなくなってしまうことが全ての依存症、アディクションの経過に見受けられます。

### 【コントロール障害】

その一方で現実世界での辛さはなから変わっていないどころか、ますます周囲からだらしがない！またやっつけるの！などと批判されます。この二次的な辛さに対しても誰も共感者や協力者(家族でも友人でも良い)がいなく孤立したまましていると、結局はネットゲーム再過剰使用に自己治療を要することになります。

コントロール障害は依存症の診断の判断基準の大きな要素です。なお、それ以前の不適切使用の段階までは乱用といえます。ただし、平素の相談では、耐性の有無や乱用と依存症の区別には拘らず、ネットやゲームを巡って困っているあるいは対立しているお子さん(当事者)とご家族の支援をさせていただいて

ます。現代の青少年(若者)にとって色々な意味でネットやスマホが自己治療ツールとなっていると考えられるでしょう。依存症の発症や重症化予防のためにもネットゲーム依存について、何らかの診断名化されることで親御さんや教員が、精神保健福祉センターや保健所、専門医療機関などでスーパードライヴを受けられる機会が増えることに期待しているところ

になるのは、むしろ重症化の要因となります。

- ・家族歴や学校、職場環境に大きな問題の無い場合、ベースに依存症以外の精神障害があり、その不安や違和感を軽減するための自己治療だった可能性も視野に入れましょう。
- ・薬物依存では米国の研究により以下のようなことがわかってきました。注意欠陥の人が集中力をアップさせるためにアツパー(覚醒)系を、緊張過多の人はそれを和らげるためにダウナー系を求めるときつかけになるというものです。

- ・辛さを軽減したいという動機は理解するべきですが、専門医療機関の治療や相談をせずに自己流の乱用であることが危険で問題なのです。
- ・また、各種研究の進捗によりネットゲーム依存だけでなく、他の依存症においても発達障害との親和性があることが近年注目されつつあり、それぞれのアディクションが少なくとも一時期は不注意や緊張感、自信の無さなどを補ってくれる面がある

現時点ではわが国はゲーム型は「ゲーム障害」、SNSなど繋がり依存型は「その他の依存」などと整理されているようですが、両者は同時に混在したり移行したりします。で、個人的にはアメリカ式の「ネットゲーム障害」の名称の方がしっくりくる、と感じているところ

### ひきこもり・不登校の背景とアディクション

ネットゲーム依存をめぐる支援に臨んでいると時期や期間は様々ですが、お子さん(当事者)に、ひきこもりの体験はほぼワンセットになっていきます。しかしこれは、他の依存症でも似たことがいえるのではないのでしょうか。例えばギャンブル依存ではギャンブルにひきこもり、ワーカホリックでは仕事にひきこもっている、と言いつつ換えることも可能だと思っ

す。ほとんどの場合、初回相談時の親御さんは第3回でご紹介するカサンドラ症候群という心因反応が生じているように感じます。具体的に親御さんが「また裏切られた」、「私がこの子をちゃんとさせなければ」などの焦りや思いが募るあまり、お子さんに対して「支配的且つ否定的な言動」を繰り返してしまい、それを受けたお子さんは、ますますネットゲームの世界が必要となり重症化のおそ

れゆえに、否定され孤立したまましていると、多様な心的苦痛を抱えた人の依存症の入口になり得ると感じています。

- ・既にアルコール、薬物、ギャンブルなどの依存症の診断を受けている方にとってインターネットやスマホは自助グループ探し、専門相談先探しの便利ツールである一方で、使い方によってはますます社会や仲間から孤立してしまいうるリアリティアディクションを形成するリスクもはらんでいるといえるでしょう。

### アディクションの形成過程

ネットゲーム依存でも【自己治療】↓【耐性】↓【コントロール障害】のプロセスが見て取れますので敢えて記載をさせていただきます。

#### 【自己治療】

リストカットや過食嘔吐を理解すれば想像がつくように単にゲームに興じているだけではなく、ネットゲーム依存もマイナスの感情(過去のトラウマ含む)を少しでもゼロに近づける手段として用いる人に発症しやすいようです。

学校や職場、家庭などに対する葛藤や過去のトラウマ、あるいは何かの心の病気などの辛さをしばらくは軽減・鎮静化してくれる効果があるのです。

#### 【耐性】\*物足りなくなる\*

前記のような自己治療はやがて心身共にその刺激に慣れてしま

関係依存	行動依存	物質依存
共依存(ご家族・支援者は意識してプラスに活かしましょう。) 恋愛依存	ギャンブル ネットゲーム 仕事依存、摂食依存 抜毛症、病的窃盗 リストカット、 窃視症 接触症、ひきこもり	アルコール 薬物 ニコチン

診断名化されていないものも含め、本稿では上記のような現象を仮に「依存症」または「アディクション」として論じさせていただきます。

こともわかってきました。

- ・ネットゲーム依存親子双方の相談経験によるいわば「八木仮説」ですが、マルチツールであるスマホやインターネットは、アツパー系的にもダウナー系的にも使える、しかしそ

れもある、というスパイラルの存在です。

悲しいことですが平成28年の調査によると、我が国の15歳から39歳の若年世代の死因の1位は自殺となっています。もしかしたら若者の幸福度は低いのかも知れません。先述のアディクション発症過程を見ても分かる通り、自傷自殺に至る前に何とか気分を変えて生き抜こうとネットゲームの世界に逃避していた可能性にも想像力を働かせる必要があると感じています。

これを理解するだけでもネットゲーム依存症当事者への声かけや対応は、第4回(最終回)で紹介する依存症家族向けワークブックCRAFTにあるような、当事者の動機づ



Photo by Masahiko Yagi

けを引き出しやすい、落ち着いた穏やかなものに変化することが期待できます。経験上、CRATFの手法には依存症の回復のみならず、自傷自殺や親子相互の暴力リスクを下げる効果をも期待できるものです。

わが国の若者の幸福感の希薄さ、過労死がKARUSHIとして海外に知られるような職業倫理の有り様とネットゲーム依存が無関係とは思えません。ネットゲーム依存の深刻さと過剰なお受験、過労、自殺率の高さなど我が国と韓国に近似的なものを感じるのと同時に、根本的な問題の軽減の糸口をも垣間見ることができると可能性も感じていきます。

少々専門的になりますが、2013年にアメリカ式診断マニュアルDSM-5では乱用と依存症を「使用障害」に統合し依存症の名称をなくしたほか、今後診断名化のために検討すべき課題として「ネットゲーム障害」の名称が初めて記載されました。また同じく2013年のエドワード・J・カニンアンらの研究「人は何故依存症になるのか」により、以下のことが分かってきました。すなわち各種依存症・アディクションには少なくとも一定期間はトラウマや心的苦痛、未治療（又は治療がうまくいっていない）のなんらかの精神障害、苦手意識、自信の無

さなどを補ってくれる作用があるということですが。これら研究の結果が後の自己治療概念に基づいた治療・支援、家族支援CAATの発展にも繋がったことはいまでもありません。

そしてまるでそれらに呼応するかのよう2014年、WHO（世界保健機関）は懲罰は症状を悪化させるとして「あらゆる薬物問題の非犯罪化」を勧告しました。つまり疾病や障害に対して道徳や戒めを持ち込むことに意味はないどころか重症化の危険性すらあると考えられているのです。

ネットゲーム依存について親子双方の相談支援の経験から「批判されないから気軽に相談できる。そして親子共に孤立しない。」、このような重症化予防や回復動機づけを醸し出せる家庭のムード作りは、回復に向かう親子に見受けられる望ましく温かい変化です。我が国の若者の死因の1位が自殺、という悲しい実態を眼前にするとき、ネットゲーム依存やひきこもりが、アディクションを形成するリスクがある一方で、辛い気分を変えてくれ、むしろ自傷自殺を食い止めてくれていたという側面も否定できません。また、インターネットやスマホは極めて便利で私達だれもが多くの恩恵を受けているのも事実です。災害情報の入手、高齢者の安否確認はもちろ

ん、自傷行為や虐め被害の当事者の相談機関（者）や共感してくれる仲間と繋がる間口を広げてくれるもあります。またNTTでは専門医や支援団体と協力しキャンペーン依存症予防のための啓発アプリも公開したというニュースも記憶に新しいところです。

繰り返しになりますが経験上ネットやスマホにはある種の自己治療効果があります。それが故に孤立し批判されたままでいると、生活上の優先順位の1位がネットゲームになってしまい、依存症を形成するリスクもあることには注意が必要でしょう。自己治療で済んでいたはずが生活及び心身への弊害が生じて、なおネットやスマホに支配された生活になってしまいます。もちろん置き去りにしてしまったり大元の心的苦痛は改善していない状況ですから、2の困難を抱えることになってしまいます。

依存症によって生じた問題を恥ずかしいなどと道徳で捉えず、早めにそして気軽に相談機関（精神保健福祉センターや依存症専門利用機関）や回復者の方々に相談することが肝要と考えます。

ご参考にAAに通い決して批判されない安心できる仲間と繋がることでネットゲーム依存から回復した人もいらっしゃることを紹介して第2回を終わります。



# 琉球GAIAの家族支援プログラム

薬物依存症の治療や回復には、ご家族の果たす役割が非常に大きいという事が実証されています。私たち琉球GAIAでは「**家族と共に回復する**」と言う理念のもと、ご家族の方にも「家族支援プログラム」の参加を強くお奨めしております。

依存症と言う病気をよく理解出来るようになる事。ご本人に対する適切な対応や、コミュニケーションを行えるようになる事。依存症から回復出来るという事をご家族が信じられる事を大きなテーマにしています。また、家族会のグループがオープンであり、他の援助者や、治療機関と連携が取れている事も大切にしている事の一つです。グループに参加することで、ご家族に笑顔が戻り、本人同様、ご家族自身が仲間と出会い、回復を支援する為に必要な知識や情報を共有できる場所となるよう心がけております。

また、グループで学んだ事を実際の生活に活かせるようになるには、個別支援も大切です。個別のカウンセリングを通して個々の問題を整理しながらグループに参加して頂けると、教育プログラムの効果が最大限に発揮されると考えております。

また緊急時の対応に関しましても出来る限りのサポートをさせていただきます。

下記の家族会にはどなたでもご出席頂けますので是非ご参加ください。

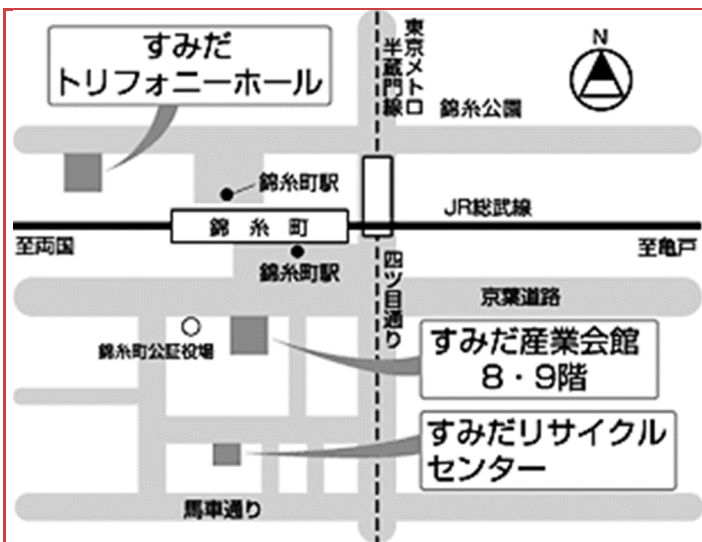
## address

GAIA家族会 会場:すみだ産業会館8・9階

〒130-0022 東京都墨田区江東橋3-9-10 TEL:03(3635)4351

東京家族会とハイビスカスは、会場も開催日時も異なりますのでご注意ください。

## map



依存症の問題を抱えた多くのご家族、琉球GAIAのスタッフ、OB、専門家を迎えてのセミナーなど、依存症に悩むご家族の方々にとって非常に内容の充実した家族会となっております。毎回40名ほどのご家族が参加されておりますが、初めてお越しの方でも参加しやすいようなアットホームな雰囲気作りを心がけています。

すみだ産業会館

毎月第2土曜日の18時～20時00分

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡ください。

琉球GAIA:098-831-2174

## information

「ハイビスカス」は薬物依存症や様々な問題を抱えた娘を持つ母親を中心としたグループです。娘とのかかわり方、対応の仕方をテーマにミーティングや勉強会を行っています。一人で悩まずに、同じ問題に取り組んでいる仲間たちと一緒に体験や気持ちを分かち合ったり対応の仕方について勉強しませんか？

場所: 東京都港区芝5-18-2 障害者福祉会館

日時: 毎月第1土曜日(祝祭日は休み)

17時～20時30分(無料)

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡下さい。

琉球GAIA:098-831-2174

GAIA家族会

TOKYO

ハイビスカス

TOKYO

沖縄県内の依存症の問題を抱えたご家族の為に家族会です。琉球GAIAスタッフが中心となり、ご家族の方からの質問や、本人とのかかわりについて具体的に提案する形で行っております。

場所: 沖縄県立総合精神保健福祉センター2F

日時: 毎月第2第4月曜日(祝祭日は休み)

19時～20時(無料)

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡下さい。

琉球GAIA:098-831-2174

沖縄家族会

OKINAWA

関西圏で依存症の問題を抱えたご家族の為に家族会です。元琉球GAIAスタッフを中心として、毎月専門的な講話や家族間での話し合いなど、充実した内容の家族会となっております。

場所: 兵庫県尼崎市南塚口町1-5-13

美容院ルーナロッサビル3F

日時: 毎月第2月曜日の15:30～17:00

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡下さい。

琉球GAIA:098-831-2174

大阪家族会

OSAKA

Call us anytime

※ご不明な点や、各ミーティングに関するお問い合わせ、お申込みは、琉球GAIA 098(831)2174までお問い合わせ下さい。また、家族会等の日程についてはフェイスブックやGAIAホームページにて随時更新しておりますのでご確認ください。

依存症は、病気ですか。

依存症は、進行しますか。

依存症は、人間関係の病気ですか。

依存症は、治療すれば回復しますか。

はい、そうです。

アルコール 薬物 ギャンブル

# 依存症

一緒に、考えよう

のこと。

**RECOVERY**

ISLAND OKINAWA

2018年 8月発行

発行|特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症  
リハビリセンター琉球GAIA

〒900-0024 沖縄県那覇市古波蔵1-18-37

TEL:098-831-2174 FAX:098-831-7174

MAIL: mail@ryukyu-gaia.jp



薬物・アルコール依存症リハビリセンター琉球GAIA

【GAIA東日本相談センター】

☎ 03-5800-5121

【GAIA西日本相談センター】

☎ 06-6433-5111

【沖縄ケアセンター琉球GAIA】

☎ 098-851-3535

フリーペーパー(無料)です、ご自由にお持ち帰りください。